

ホームレス研究—釜ヶ崎からの発信

評者 山崎喜比古 東京大学大学院医学系研究科 准教授
健康科学・看護学専攻 健康社会学教室主任/
公共健康医学専攻 健康教育・社会学教室主任

本書は、3年に亘る文部科学省科学研究補助金を受けて、日本最大の寄せ場といわれる釜ヶ崎をフィールドに、ホームレスに関して医学・保健学、社会福祉学、法律学の実践家と研究者が協同して行ってきた調査・実践を基盤にした学術研究の書である。私は、本書を読み終えて、いつになく静かな感動を覚えた。著者たちの長年の地道な実践や支援活動と結んだ学術研究の書から、保健医療福祉分野の研究はやはりこうでなくてはならない、理論研究として、現実の問題とのこのような格闘・緊張関係のもとで行われることが必要だと改めて思い知らされた。

本書の構成は、以下の通りである。

序章 人権とホームレス

第Ⅰ部 ホームレスの実態調査と実践活動

1. 野宿生活者問題(省略形)/2. 脱野宿生活者の地域居住の現状(省略形)/3. 釜ヶ崎高齢日雇い労働者の生活と健康/4. ホームレスの死(副題省略)

第Ⅱ部 ホームレス対策と法制度

5. ホームレス処遇の歴史と制度/6. ホームレスと自治体の役割/7. ホームレスの健康と保健・医療

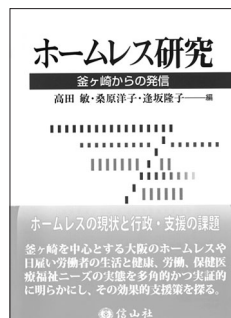
終章 ホームレス問題が社会に問いかけるもの

〈座談会〉住み続けられる街をめざして—医療・生活保護の現場から

いずれの章も、読み飽きないし読み応えがある。著者たちの現場や現実との長年の真摯な関わりから生まれたクリティカルな問いに始まり、それに応えた深い分析と洞察に引き込まれるようにして読み進めることができた。例えば、3章、4章は、「死者たちが自らの死をもって教えてくれているのではないか」というサスペンスのような問いに始まる。

本書は、それでいてわかりやすく読みやすかった。学際的な学術研究書として、各専門分野のキーワードや専門用語が頻出しているが、例えば人権概念にせよホーム

高田敏・桑原洋子・逢坂隆子
(編): ホームレス研究—釜ヶ崎からの発信。2100円＋税、2007、信山社



レスの社会的処遇にせよ、法律学の執筆者によって、その歴史からしっかりと、かつ簡潔に解説され、医学用語についても註が丁寧に付けられている。また、われわれのような保健医療福祉分野で仕事をする者にとっても、本書の随所で紹介され論じられている基本的人権論は、基礎理論、基本理論としてますます重要不可欠になってくるものと思われた。

本書の終章も、ホームレス問題は、「健康の不平等の縮小」という欧州や英国で採用されている政策の見地からの接近も重要であると指摘した上で、「健康の不平等を縮小させるには経済格差の是正といった政策以外にも、さまざまなアプローチを必要としている。健康教育、食生活の改善、生活習慣の変容、健康診断や医療の普及、安定した住居の供給といった他の分野の政策も、健康の不平等を縮小させるために不可欠なものである」と述べ、その観点から著者たちが行ったホームレスの人々の生活実態調査結果を要約的に紹介している。そして最後に、「健康支援から包括的支援へ」という新しい理論的枠組みとともに、「包括的支援施策の課題」を整理し提示して結んでいる。本書は全篇、このように理論的にも実証的そして実践的にも示唆と説得力に富んでいる。各章の最後には必ず「今後の方向性と課題」や「提言」が示され、しかも実用的である。

本書は、ホームレス問題の研究者や実践家にはもちろん、関心を寄せる皆さんにも重要基本文献や入門書、生きた教材としてぜひお読みいただき、あるいはお使いいただきたい。また、社会構造由来のその他の健康問題に取り組む研究者と実践家にも、示唆に富む点でお勧めしたい書である。